

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：18001

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K13066

研究課題名（和文）カリキュラム改革における教師教育論の生成と展開に関する比較教育史的研究

研究課題名（英文）A Comparative Historical Study on the Formation and Development of Teacher Education Thought in Curriculum Reform

研究代表者

塚原 健太（TSUKAHARA, Kenta）

琉球大学・教育学部・准教授

研究者番号：00782426

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：国際的な新教育の影響を視野に入れ、大正新教育期にカリキュラム改革に取り組んだ小学校において、教師のカリキュラム開発能力形成を支える研究態勢を考察した。その結果、以下が明らかになった。

(1) 岡崎師範学校附属小学校に佐々木主事は、個性調査で教師の観察記録を重視した。(2) 実験学級では、担任教師岩瀬の手探りにより実践から理論が構築され、それが共有されることで、各教師の専門教科の文脈で実践改革を可能とした。(3) 東京女子師範学校附属小学校の唱歌専科訓導玉村は、低学年担任教師との協働による題材研究を通して、子どもの事実に即して自らの実践知を更新するカリキュラムの実践的研究の主体として成長していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で明らかになった知見からは、カリキュラム改革のモデルや実践を規定する枠組みを指定するのではなく、教師の手による実験的な研究で得られた実践知を理論化し、それを共有する研究態勢を構築すること、またその理論をもとに各自の専門の文脈において試行錯誤しながら実践研究に取り組める態勢を構築することにより、教師をカリキュラム開発の主体として成長させていく可能性が示唆された。この歴史的示唆を踏まえ、今後、教師教育の分野での議論が必要であろう。

研究成果の概要（英文）：This study examined how the thought of teacher education that supports the curriculum reform by teachers was generated and developed in the elementary school in the Taisho New Education period.

As a result, the following points were clarified. First, at the Elementary School Attached to Okazaki Normal School, Director H. Sasaki, who supported the establishment of the experimental class, placed on children's understanding through Observation records by teachers. Second, in the experimental classes at the school, theory was constructed from practice based on the fumbling experiments. Third, by theorizing the practical knowledge, teachers in the school were able to reform practices based on the practical theory in the context of their respective specialized subjects. Fourth, N. Tamamura, who teaches singing at the elementary school attached to Tokyo Women's Normal School, through research on subject-matters with the lower grade teachers, has grown as a practical researcher on curricula.

研究分野：教育学（教育史・カリキュラム論）

キーワード：カリキュラム 教師教育論 教師の成長 校内研究体制 大正新教育

1. 研究開始当初の背景

近年、大正新教育の実態を教師によるカリキュラム開発に注目し、解明する研究が蓄積されるようになってきた(橋本 2010 など)。しかし、カリキュラム開発に伴う教師の能力形成に注目した研究は、今日の教師教育プログラム開発の基礎研究として重要であるが、緒に就いたばかりである。

研究代表者によるこれまでの研究を通して、カリキュラム研究を主導する校長や主事の交代や、新任教師を取り込んだ研究態勢を構築できなかったことにより、教師たちに形成されたカリキュラム開発能力を維持・発展させていくことができないという課題を、いくつかの新教育実践校が抱えていたことが明らかになってきた。長期にわたってカリキュラム改革に取り組んでいた東京女子高等師範学校附属小学校や明石女子師範学校附属小学校などを対象とした研究は、カリキュラム研究の主導者の役割については明らかにしてきたが(橋本 2014 など)、校内における教師のカリキュラム開発能力を維持発展させる仕組みや、新任教師教育の実態には注目してこなかった。

2. 研究の目的

以上のような背景に基づき、本研究では、欧米の新教育運動における教師教育論との影響関係視野に入れ、カリキュラム改革に取り組んでいた小学校において、教師のカリキュラム開発能力形成を支える教師教育の態勢がどのように発生し、展開したのかを解明することを目的とした。

3. 研究の方法

以上の目的を達成するために、本研究では、まず『教育関係雑誌目次集成』に掲載されている雑誌等を中心に調査を行い、当時の教師教育論に関する全体的な動向を把握した。次に、全校的な研究態勢を構築し、カリキュラム改革に取り組んだ岡崎師範学校附属小学校(愛知県第二師範学校附属小学校)と東京女子高等師範学校附属小学校を事例として取り上げて、他校から赴任した新任教師が全校での研究課題に基づき、自身の研究や実践を変容させていく過程を明らかにした。また、両校でのカリキュラム改革を先導した主事や教師に注目し、全校の研究課題やそこで参照されていた欧米の教育情報と、それをもとに構築されたカリキュラム理論や研究態勢の特質を検討した。それにあたっては校内組織の規定、研究経過の記録、会議資料、実践資料などの学校文書、教師が著わした雑誌記事や書籍等の収集を行った。以上に基づき、具体的には、次の点について分析を行った。

- (1) 事例 1: 岡崎師範学校附属小学校(以下、岡崎師範附小)
カリキュラム改革の端緒となった特設学級の設置に関与した佐々木兵四郎主事の欧米教育情報受容の特質とそれを基にした個性調査論の展開
特設学級担任の岩瀬六郎による実践研究の過程と実践知の理論化
実践から構築されたカリキュラム理論に基づく新任教師による実践改革の過程、およびそれを支える研究態勢
- (2) 事例 2: 東京女子高等師範学校附属小学校(以下、東京女高師附小)
カリキュラム改革を主導した北澤種一主事による「作業教育」に基づく教科改革論
唱歌専科教師玉村なみの低学年教師との共同研究による意識変容の過程
玉村なみをカリキュラムの実践的研究主体として成長させた研究態勢の特質

4. 研究成果

まず以下のような資料の調査と収集を行うことで、カリキュラム研究の実践的な研究に携わる過程における事例教師の成長過程とともに、それを支えるカリキュラムの研究態勢を明らかにすることができた。

- (1) 愛知県第二師範学校附属小学校主事であった佐々木兵四郎に関する資料調査
詳しい経歴および転居先の調査による個人蔵資料の所在の可能性の調査。佐々木本人の転居先は判明したが、所在地に子孫の在住は確認できず、個人蔵資料の調査は実施できなかった。
著書および雑誌記事の調査に基づき、佐々木が参照していた欧米教育情報の特定。
佐々木が派遣された実業之日本社主催の米国視察の経路や参観した学校の特定。
上記で参照された理論と実践に関する資料の調査。

- (2) 岡崎師範附小におけるカリキュラム研究態勢と教師の成長過程に関する資料調査
特設学級で担任教師を務めた岩瀬六郎の研究経過に関する資料の調査
特設学級での研究成果の理論化の過程とそれを全校に共有する研究態勢に関する調査
全校で共有された理論をもとに、教科の実践改革を展開した教師の成長過程が看取できる資料の調査
- (3) 東京女高師附小におけるカリキュラム研究態勢と教師の成長過程に関する資料調査
「作業教育」を提唱し、カリキュラム改革をリードした北澤種一主事のカリキュラム論、教科教育論、教材論に関する資料調査
唱歌専科教師玉村なみの研究過程や成長過程が看取できる雑誌記事等の調査
全校でのカリキュラム研究態勢や低学年担任教師による題材研究の実態に関する調査

以上の調査の成果に基づき、教師の成長過程におけるカリキュラム研究態勢を教師教育の視点から検討することにより、以下の知見を得ることができた。

第一に、愛知県第二師範学校附属小学校（後に岡崎師範学校附属小学校に改称）において、実験学級の創設を支えた佐々木兵四郎主事は、心理学を修め、米国視察などを通じた欧米の個性調査に関する情報を収集していたが、心理的測定よりも、教師による記述を通じた児童理解を重視していたことが明らかになった。佐々木は広島高等師範学校を卒業と同時に、修身、歴史、教育、地理の免許を取得し、広島県内の中学校教諭を経て同高等師範学校研究科教育学専攻で一年の課程を修めた。その後、私立広島女学校教師在職中に、広島高等師範学校教授の塚原政次、岡部為吉両氏について教育学、心理学、独逸語の研究に従事した。その間、ポールドウィン、ソーンダイクなどの心理学に基づいた論考を雑誌記事に投稿していた。1915年からは愛知県内小学校の校長を勤め、その間に実業之日本社主催の米国への校長派遣事業によって、米国各地の学校等の視察を行った。1919年には愛知県第二師範学校附属小学校主事に就任し、1920年2月には、岩瀬六郎に「新教育の計画とその学級経営の全責任」を任せることにより実験学級を設置し、カリキュラム改革を開始した。佐々木による研究成果をまとめた1923年刊行の『個性及個性教育の研究』には、欧米の心理学や教育学の理論の整理をもとに、個性調査および個性教育に関する持論が展開されているが、その実践化にあたっては、実際に使用していた個性調査の様式が掲載されている。その様式は、教師による観察記録をエピソードレベルで記述するものとなっており、教師による児童の姿の見取りが重視されていた。以上から、佐々木が直接的に特設学級における実験を主導したことの看取できる資料は管見の限り見つけられなかったが、彼による教師の主観を通じた児童の見取り、すなわち子どもや教育の事実から実践理論を構築するという方針が、実験学級での研究の方針に影響を与えたことが推察される。

第二に、そうした方針の影響を受けて、同校の実験学級では、欧米の理論に基づき実践を構築するのではなく、担任教師岩瀬六郎の手探りの実験に基づいて実践から理論が構築されることが明らかになった。実験学級における研究がスタートして2年が経過した1922年の記事では、「教科課程の改造」が取り組むべき課題の一つとして取り上げられおり、早期からカリキュラムの具体的に改革に取り組んでいたことが明らかである。カリキュラム改革にあたっては、所与の教科を前提とせず、教科内容と学習方法の両面から「国語」、「直観科」、「図画手工」の3つの基礎教科が導き出された。注目すべきは、教科や教材の配列を「社会的個人の完成」という教育目的を達成するために、児童の日常生活と社会の要求の両方の観点から選択すること、そのために「児童の発達程度」と「児童の要求」に基づいて設定すると考えられていた点である。

第三に、そうして構築された実践知を「生活科」として理論化することによって、校内の教師たちがそれぞれの専門教科の文脈で実践改革を可能とした。その後、実験学級での研究成果に基づき、1925年頃には、生の様態に基づく教育目的論の深化と、社会生活の様式に基づく学習方法の理論化が行われた。これらはいずれも、子どもの生活すなわち実践を通じた子どもの事実に基づいて構築されたものであった。こうして構築された実践の様態は「生活科」の名のもとにカリキュラム構成理論として構築され、全校に共有されていった。「生活科」は一つの教科や領域を意味するのではなく、児童の経験の連続性や発展性の論理に即してカリキュラムを編成するという、カリキュラム構成理論であった。1920年代の中頃から同校では、このように実験研究によって生成された実践知を理論化することで構築されたカリキュラム構成理論を全校で共有することによって、実験学級以外の学級でもカリキュラム改革に取り組まれた。教師たちの間で共有されたのは、カリキュラムのモデルや枠組みではなく、実践知から構築された原理であったため、各教師はそれぞれの専門教科の文脈において、教科の生活化を主題とした研究に取り組むことを可能にした。

第四に、東京女子師範学校附属小学校の唱歌専科訓導玉村なみは、同校の低学年担任教師との協働による題材研究を通して、子どもの事実に基づいて自らの実践知を更新していくカリキュラムの実践的研究の主体として成長していた。彼女は1924年に同校に赴任した当初は、歌をうたう技能を習得させるという既存の目的論を転換することができず、「作業教育」の原理との間で葛藤を抱えていた。しかし、担任教師との題材とりわけ遊戯に関する共同研究を契機として、「作業教育」の原理的理解やそれに基づく実践を展開することが可能となった。すなわち、玉村は自身の役割を、児童の生活世界にあるわらべ歌や様々な唱歌集に収められた歌曲を題材の視点

で分析することで、子どもが歌いたいという動機を喚起し、子どものより深い音楽的な追究を可能にすることであると捉えるようになったのである。ここには、子どもと音楽との境界でその歌曲がもつ歌詞や音楽の特徴をつかみ、それを実践として展開することを通して、子どもの事実に対して自らの実践知を更新していくカリキュラムの実践的な研究の主体として、唱歌専科教師がかかえる制約を自認しつつも、同僚教師との共同研究を通して実践知を環流しようとする彼女の姿勢に見出せる。教科の枠を超えた共同研究において、担任教師たちが蓄積した実践知に接し、同僚教師の実践知に自身の教科観を照射させることができたからこそ、彼女は自身の実践を省察し、教科や教材の在り方にまで立ち返って改革を実現することができたといえよう（塚原2021）。

以上の知見を教師教育の観点から総括すれば、教師のカリキュラム開発能力の形成を可能としたのは、次のような教師を支える研究態勢であった。まずは、両校では欧米のカリキュラムの理論や実践を参照しつつも、校内の教師たちの手による実験的な研究や共同研究による成果に基づき、実践知を理論化することで共有できる態勢が採られていた点である。次に、全校の教師でカリキュラム理論を共有しつつも、それぞれの専門教科や課題意識に即して試行錯誤が可能な研究態勢となっていた点である。これらの研究態勢が教師のカリキュラム開発能力形成の場として機能していたといえよう。すなわち、全校の教育課程改革の方針と自身の実践との相互作用によって、各自の子ども観や実践思想の次元でカリキュラム実践を省察することが可能となり、子どもの事実に基づいたカリキュラム開発の主体としての成長を促したのである。

<引用文献>

塚原健太（2020）「東京女子高等師範学校附属小学校の作業教育における教育課程研究と研究態勢 「作業科」の開発を中心として」『児童教育』第30巻、pp.35-40。

塚原健太（2021）「東京女子高等師範学校附属小学校のカリキュラム改革における教科研究 協同研究を通じた唱歌専科教師玉村なみの実践改革」橋本美保・田中智志編著『大正新教育の実践 交響する自由へ』東信堂、pp.208-334。

橋本美保（2010）「西口槌太郎による生活単元カリキュラムの開発と実践」『東京学芸大学紀要』第61集、pp.25-37。

橋本美保（2014）「明石女子師範学校附属小学校におけるドクローリー教育法の受容 及川平治によるドクローリー理解とカリキュラム開発」『カリキュラム研究』第23号、pp.1-13。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 塚原 健太、永山 勝幸	4. 巻 (118)
2. 論文標題 子どもを真ん中においた1年生の授業改革 八重瀬町保幼小連携プロジェクトへの取り組みを通じた教師の意識変容	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 フレネ教育研究会会報	6. 最初と最後の頁 65-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 塚原健太	4. 巻 -
2. 論文標題 助言者講評 第2分科会の研究発表を受けて	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 沖縄件私立保育園連盟 第34回保育研究大会報告書	6. 最初と最後の頁 73-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 今田 匡彦、板橋 江利也、松永 加也子、塚原 健太、小田 直弥	4. 巻 (46)
2. 論文標題 教科教育と教科専門 新学習指導要領を基盤として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本教育大学協会全国音楽部門会報	6. 最初と最後の頁 12-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 塚原 健太	4. 巻 30
2. 論文標題 東京女子高等師範学校附属小学校の作業教育における教育課程研究と研究態勢 「作業科」の開発を中心として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 児童教育	6. 最初と最後の頁 35-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 今田 匡彦、板橋 江利也、松永 加也子、塚原 健太
2. 発表標題 2021年度 日本教育大学協会全国音楽部門 第46回全国大会（オンライン（Zoom））
3. 学会等名 教科教育と教科専門 新学習指導要領を基盤として（全体会1）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 塚原 健太
2. 発表標題 東京女子高等師範学校附属小学校のカリキュラム改革における教科研究 唱歌専科教師玉村なみの教材概念の変容
3. 学会等名 日本教科教育学会第46回全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 塚原 健太
2. 発表標題 大正期の岡崎師範学校附属小学校におけるカリキュラム構成論の形成 特設学級における実践的研究の到達点
3. 学会等名 日本カリキュラム学会第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 塚原 健太
2. 発表標題 東京女子高等師範学校附属小学校の作業教育における教育課程研究と研究態勢 「作業科」の開発を中心として
3. 学会等名 お茶の水女子大学附属小学校校内講演会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kenta Tsukahara
2. 発表標題 The Acceptance of American Progressive Music Education in Taisho New Education: How did Coleman's "creative music" reform Japanese teacher's practice?
3. 学会等名 International Standing Conference for the History of Education 40 (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 橋本 美保・田中 智志 (編著)、塚原 健太ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 461
3. 書名 大正新教育の実践	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関